梁の武帝

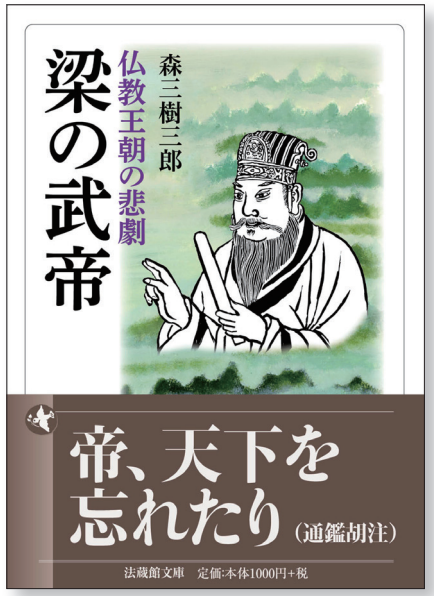
仏教王朝の悲劇

《法蔵館文庫》

森三樹三郎［著］　船山　徹［解説］

文庫判・並製カバー・二一七頁・本体一、〇〇〇円＋税

2021年9月刊行



皇帝菩薩と呼ばれ篤い仏教信仰を持った武帝は、侯景の侵入に遭い、儚くも幽閉の身のまま餓死した。果たしてそれは仏教溺信が招いた悲劇だったのか。六朝時代における士大夫の精神を縦横に描出した傑作。待望の文庫化。

一　序　説
二　六朝時代の性格
三　武帝の生立ち
四　武帝の政治
五　梁代の文化と武帝の教養
六　武帝と仏教
七　梁の滅亡――侯景の乱――
あとがき
参考文献略
南朝世系表
南朝年表
解　説　船山　徹

武帝は、その豊かな教養の内容においても、またその精神の方向においても、六朝の知識人――士大夫の典型であったことを示している。このことは、武帝が時代の子であったことを、とりわけ時代の動きに敏感な人物であったことを物語るものであろう。けれども武帝は、単なる時代の子であるというだけには止まらなかった。天子という、世にも稀な地位を与えられた結果として、武帝は常に梁代文化人の先頭に立ち、そしてまたその保護者としての偉大な足跡を残した。まことに梁朝五十年の治世は、南朝文化の黄金時代と呼ぶにふさわしいものであったが、この盛世の出現は武帝個人の力に負うところが少くなかった。もし武帝が現われなかったとすれば、梁朝の絢爛たる文化は生れなかったであろうし、南朝文化もその特色を十分に発揮する機会を失っていたことであろう。この意味では、まさしく武帝は梁朝文化の育ての親である。この時代の子にして、同時に時代の父であるという二重の性格は、武帝をして南朝文化の象徴と呼ぶにふさわしいものにさせる。ここでは、武帝を借りて時代を語り、また逆に時代を借りて武帝を語ることが許されるであろう。（序説より）

【著者略歴】一九〇九年京都府に生まれる。京都大学文学部哲学科卒業。大阪大学名誉教授。文学博士。著書に『中国古代神話』（清水弘文堂書房）、『上古より漢代に至る性命観の展開』（創文社）、『「無」の思想』『「名」と「恥」の文化』『神なき時代』『老子・荘子』（ともに講談社）、『老荘と仏教』（法藏館、後に講談社学術文庫）、『中国思想史』（第三文明社）など、訳書に『荘子』（中央公論新社）、『墨子』（筑摩書房）などがある。一九八六年、逝去。

注文書

（書店名）

ご担当　様

冊

法藏館

森三樹三郎 著

梁の武帝

仏教王朝の悲劇

一、〇〇〇円＋税

ISBN978-4-8318-2626-8 C1122

ご住所

お電話

お名前

ご注文は FAX:075-371-0458

法藏館
〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入
TEL 075-343-0458 FAX 075-371-0458
http://www.hozokan.co.jp　info@hozokan.co.jp

東　洋　史